

幼児教育における創造的音楽学習に関する研究

—イングランドの EYFS 指針及び実践例に着目して—

A Study on Creative Music Making in Early Years Education: Focusing on EYFS Framework and its Practice Examples

中村 礼香¹⁾, 水谷 いつみ²⁾
Ayaka Nakamura, Itsumi Mizutani

¹⁾ 鹿児島女子短期大学, ²⁾ 鹿児島国際大学

日本では、イギリスの創造的音楽学習の概念が1980年代より小学校教育において広まり、1989年の学習指導要領から音楽づくりに関する独立した項目が立てられ、教科書にも音楽づくりの内容が取り入れられている。一方幼児教育においては、幼稚園教育要領等の中で素材を用いた音楽活動や音遊びなどが示唆されているが、具体的な活動が紹介されているわけではなく、活動内容については保育現場に委ねられていて、現場でどのように実践を行うのか明確ではない。そこで、創造的音楽学習が積極的に行われているイギリスの中でも、イングランドの日本での幼稚園教育要領に当たる EYFS 指針とそれに付随する実践の指針を分析し、イングランドでどのように創造的音楽学習が実践されているのかを探ることとした。その結果、具体的に音で遊ぶ方法や音楽づくりの方法が提示されており、日本の幼児教育において参考になるものが多くあることが分かった。

Keywords : Creative Music Making, early years education, expression, Statutory Framework for Early Years Foundation Stage
キーワード : 創造的音楽学習, 就学前教育, 表現, EYFS 指針

1. はじめに

わが国の幼稚園教育要領等の領域「表現」、特に音楽分野においては、幼児自らが音や音楽で十分遊び表現する楽しさを味わうことや、自然の中にある音に気付くようにすること等がねらいや内容項目、解説に記載されている。また、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿として、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達と工夫して創造的な活動を繰り返したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりすることと記載されている。したがって保育においては、歌唱活動や器楽合奏等の音楽活動だけではなく、身近な音や素材を用いた表現活動や創造的な表現活動を取り入れることが求められている。

一方、小学校教育においては、「創造的音楽学習 (Creative Music Making)」という理念が、イギリスの音楽教育学者である J. Paynter, P. Aston 共著の *Sound and Silence* (1975) を山本・坪能らが『音楽の語るもの』(1982) という邦題で翻訳して出版したことを契機として1980年代に日本の音楽教育界に広まり、1989年の小学校音楽科の学習指導要領改訂の際、「A 表現」の領域に「(4) 音楽をつくって表現するようにする」という独立した項目が立てられた。高須 (1996) によると、創造的音楽学習は、教師が音それ自体を教材とし、あるいは現代の音楽や民族音

楽などあらゆる様式の音楽を教材として、子どもの創造的で自発的な音楽学習を援助することである¹⁾。この、「音それ自体を教材として子どもの創造的で自発的な音楽学習を援助する」という理念は現在の幼稚園教育要領等に記載されていることと一致すると考える。高須 (1996) によるとイギリスでは、1960年代以降の J. Paynter らの教育実践活動の結果として、創造的音楽学習が全国的に普及し、多くの学校音楽カリキュラムの中に取り入れられた。水谷もイギリスで音楽の創作活動が学校教育に取り入れられている現場を多く見ている。

そこで本研究では、イギリスの中でもイングランドの創造的音楽学習が積極的に行われている学校教育の前段階である就学前教育において、どのような音楽活動が行われているのか、創造的音楽学習が行われているのかについて調査したく、日本でいう幼稚園教育要領に当たる 2021年に改訂された就学前基礎段階の法定指針 (Statutory Framework for Early Years Foundation Stage, 以下 EYFS 指針と略記する) を分析し、日本の幼稚園教育要領と比較することとした。また、EYFS 指針に付随する保育者のための保育の手引きとなる『発達は大事』(Development Matters), 『生まれてから5歳までは大事』(Birth to 5 Matters), 及び『幼児期の音楽的発達は大事』(Musical Development Matters in the Early Years) の分

析を行い、イングランドにおいてどのような音楽活動が推奨されているのかについて調査することとした。なお、イングランドはイギリス（グレートブリテン及び北アイルランド連合王国）の一つの地域であり、スコットランドやウェールズ、北アイルランドと管轄や法的枠組が異なることを付け加えておきたい。

2. EYFS 指針について

EYFS 指針は2000年に制定された『3歳から5歳児の保育に関する指針』（The Foundation Stage）に始まる。対象年齢を0歳から5歳に拡充し、2008年に法定化したものがEYFS 指針である。その後、幾度かの修正を経て、2021年に最新版が公布されている。

EYFS 指針は0歳から5歳までの幼児期の学習や発達、健康管理の基準などを定めており、教育水準局（Ofsted）に登録している保育施設は必ずこれに従わなければならない²⁾。

EYFS 指針の学習と発達は7領域に分けられている。領域は表1の通りとなっており、日本の幼稚園指導要領の「表現」に当たるものは「アートやデザインによる表現（Expressive Arts and Design）」である。

表1 EYFS 指針（2021）の7領域

主要領域 (Prime areas)	コミュニケーションと言葉 (Communication and Language)
	身体の発達 (Physical Development)
	人格、社会性、情緒の発達 (Personal, Social, Emotional Development)
特定領域 (Specific area)	読み書き (Literacy)
	算数 (Mathematics)
	世界を理解すること (Understanding the World)
	アートやデザインによる表現 (Expressive Arts and Design)

保育者は学習目標に基づいて指導を行い、5歳のレセプションイヤー（小学校進学前の1年）の終わりにEYFS プロファイルを作成する必要がある。学習目標はすべての領域を合わせて17個設定されており、各項目においてそれぞれの子どもが期待された目標を達成しているか（expected）、まだ伸びている途中であるか（emerging）の2段階評価を行う。

3. 表現領域について

3-1. 「教育プログラム」と「学習目標」

EYFS 指針には、「教育プログラム」と「学習目標」が設定されている。教育プログラムは「設定された各学習領

域に応じて以下のような活動や経験を含めなければならない²⁾とされたものである。表現領域の教育プログラムは表2の通りであり（日本語訳は水谷）、「子どもたちが見て、聞いて、参加するもの」という幅広い自己表現や芸術の活動を通して伝え合う能力を発達させるよう記載されている。

表2 「アートやデザインによる表現」の教育プログラム

教育プログラム
子どもたちの芸術的・文化的自覚の発達は、彼らの想像する力や創造する力を支える。
子どもたちが、幅広い媒体や素材を探ったり遊んだりすることができる芸術に、定期的に携わる機会を持つことが重要である。
彼らが見て、聞いて、参加するものの質や多様さは、理解力や自己表現力、語彙力や芸術を通してコミュニケーションをとる能力を発達させるのに極めて重大である。
彼らの経験の頻度、繰り返し、深さは、聞いたこと、反応したこと、観察したことを解釈したり味わったりする過程に必要不可欠である。

また、表現領域の学習目標（Early Learning Goals：ELG）は表3の通り、2つ設定されている（日本語訳は水谷）。ELG16「材料を使って創造すること」において音楽活動に関連する文言はないが、ELG17「想像力、表現力が豊かであること」には、歌うことや音楽に合わせた身体表現を行うことが定められている。ELG16と17を通じて「過程を説明しながら」、「友達や先生と」、「みんなといっしょに」など、周囲の人々と協働して表現活動を行うことが明記されている。

表3 「アートやデザインによる表現」の学習目標（ELG）

ELG 16「材料を使って創造すること」
<ul style="list-style-type: none"> 色やデザイン、質感、形や機能を試しながら、幅広い素材、道具、技術を安全に使ったり探ったりする。 作成過程で何を使ったか説明しながら自分の創作物を共有する。 説話や物語のキャラクターを演じるとき、小道具や素材を活用する。
ELG 17「想像力、表現力が豊かであること」
<ul style="list-style-type: none"> 友達や先生と説話や物語をつくったり、改作したり、詳しく話したりする。 よく知られた童謡や歌を歌う。 他の子どもたちと歌、童謡、詩、物語を実演し、適当なときには音楽に合わせて動くことに挑戦する。

3-2. 考察

EYFS 指針では「子どもたちが広い範囲の媒体や素材と

共に探求し遊ぶ」や「子どもたちが見て、聴いて、参加する」表現活動という記載がされており、幅広い様々な表現活動を行うことを求めていることがわかる。これに関しては、日本でも総合的な表現遊びが推奨されており、幼稚園教育要領等も EYFS 指針もどちらも多様な経験を重視している。また、EYFS 指針には「材料」「道具」「用具」といった言葉が使用されており、幼稚園教育要領等においても、「素材」「道具」「用具」といった言葉が使用されており、類似していると言える。

ただし EYFS 指針は「学習目標」となっており、子どもが獲得することを期待する能力を具体的に設定している。前述したように、保育者は学習目標に基づいて指導を行い、5歳のレセプションイヤーの終わりに EYFS プロファイルを作成する必要がある。各項目においてそれぞれの子どもが期待された目標を達成しているか (expected)、まだ伸びている途中であるか (emerging) の2段階評価を行う。一方日本では、「ねらい」となっており、子どもを評価する方法は決められていない。幼稚園教育要領等にも、保育者が子どもの活動を予想しながら作成した指導計画のねらいや内容と、実際に保育を行う中で見られた子どもの姿を照らし合わせて、子どもの経験がどのような育ちにつながるものであったかを捉えなおし、次の計画に繋げるという自己評価や保育施設の自己評価については記載されているが、子どもを評価する方法については記載されていない。

EYFS 指針も幼稚園教育も共通していることは、様々な表現活動を通して、子どもたちの創造力、想像力、表現力等を高めることを目指しているということである。

4. イングランドにおける音楽表現活動の実践例

4-1. 『発達は大変』、『生まれてから5歳までは大変』、及び『幼児期の音楽的発達は大変』について

では、実際にイングランドの就学前教育ではどのような音楽活動が行われているのだろうか。EYFS 指針を実践する際に、保育者のガイドになる文書が主に2つ発表されている。

1つ目は教育省 (Department for Education) が公表している『発達は大変』(Development Matters) である。具体的な指導内容や活動例、子どもの観察ポイントが示されたもので、実践の手引きとも言えるだろう。法的な拘束力はない。教育省はこれを、子どもたちが知ったり行ったりする全てのことを書いたリストではなく、保育者のプロフェッショナルな判断をガイドするものであるとしている²⁾。2つ目は幼児教育連合 (the Early Years Coalition) が公表している『生まれてから5歳までは大変』(Birth to 5 Matters) である。2021年の EYFS 指針改訂により初め

て発行されたものである。「教育セクターによる、教育セクターのためのガイド」を謳っており、幼児たちを学習目標に到達させるという保育者の法的な責任を助けるものとしている³⁾。両者はその違いについて困惑させる部分があるが、教育省や教育水準局は「どちらかを必ず使わなければならないわけではない」としており、両者とも EYFS 指針に則って指導をする中で困った時や迷った時に参照する選択肢の1つであると言える。

もう1つ、2018年にニコラ・バークが考案した『幼児期の音楽的発達は大事』(Music Development Matters in the Early Years (以下、MDM)) という音楽のための非法定プログラムが、英国幼児教育協会 (The British Association for Early Childhood Education) によって発行された。この MDM は音楽活動や音楽に関わる子どもの発達のみについて特化して記載されているため、EYFS 指針の学習領域や学習目標の観点から構成されているわけではないと明記されている。また MDM は、子どもたちが「すべきこと」を確実に行うために書かれたものではなく、子どもたちが自然に行うことの例と可能性を提示し、それをどのように認識し、評価し、育むことができるかを示すために書かれたものであると記載されている⁴⁾。

本章では、『発達は大変』と『生まれてから5歳までは大変』、及び『幼児期の音楽的発達は大事』に示されている音楽表現活動の実践例を見ることとする。

4-2. 『発達は大変』における音楽表現活動について

『発達は大変』(Development Matters) には、領域ごとに、さらに年齢ごとに活動例が記載されている。年齢の区切りは、生まれてから3歳まで、3歳・4歳、4歳・5歳と大きく3つに分かれている。

アートやデザインによる表現の個所には、造形表現、音楽表現のそれぞれに分けて「学習内容」と「学習のサポート例」が記載されている。なお、身体表現活動は音楽活動に含まれている。その音楽表現活動の中でも、特に創造的音楽学習に関わる内容を取り出すこととした (日本語訳は中村)。なお、創造的音楽学習は前述したように、教師が音それ自体を教材とし、あるいは現代の音楽や民族音楽などあらゆる様式の音楽を教材として、子どもの創造的で自発的な音楽学習を援助することである。

生まれてから3歳まで

- 赤ちゃんは生まれた時から音楽を楽しみ音楽をつくる準備ができているため、音や音楽に注意を向ける
- 赤ちゃん向けの歌やミュージカル、歌ゲームで、音楽が変化した時に感情的および身体的に音楽に反応する
- 赤ちゃん・幼児に様々な文化、ジャンルの歌や音を聴

かせる

- 声や楽器で、強弱、速さ、音高、リズムなどを変化させて声を出したり音を出したりすることを楽しむ
- 瓶でテーブルを軽く叩いたり、フェンスに添って小枝を走らせたりといった様々な音の出し方でリズムカルな反復の音を出して演奏する

3歳・4歳

- 自分の歌を作曲したり、知っている曲を中心に即興で曲をつくったりする
- 楽器を演奏する際、様々な奏法で音を出し、自分の気持ちや考えを表現する

4歳・5歳

- 英国の伝統音楽や民族音楽など様々な種類の音楽を紹介し、新しい音楽の世界へ興味をもたせる
- 注意深く音楽に耳を傾け、音楽に合わせて動いたり、話したりして楽曲の変化やパターンを表現する
- 音楽に合わせて歌ったり、膝を叩いたり、踊ったり、楽器や音が出るものを用いて自分の音楽をつくったりしながら一定のビートを保つよう促す
- 太鼓の音に合わせて行進したり、マラカスの音に合わせて忍び歩きをしたりといったように、様々な動きに音を付ける
- 自分の名前や物・動物の名前や歌の歌詞の音節に合わせて手を叩くなど、言葉に合わせてリズムを叩く
- 音楽が突然大きくなるとジャンプするなど、音楽に合わせて動きを変化させる

以上を見てみると、かなり具体的に活動内容が記載されていることがわかる。わが国の幼稚園教育要領等には、具体的な活動は明記されておらず、保育者の資質に任されている。イングランドの『発達は大事』に書かれている内容は、中村が授業の中でも学生たちに教授している内容ではあるし、保育者向けの研修会等でも伝えていることではあるが、なかなか実践しているという話を聞くことはない。『発達は大事』に記載されている活動は創造的音楽学習に関わることが多く、就学前教育として日本よりもより創作活動などが行われる土壌が育っていることがわかる。

4-3. 『生まれてから5歳までは大事』における音楽表現活動について

『生まれてから5歳までは大事』(Birth to 5 Matters)においても、領域ごとや年齢ごとに活動例が記載されている。年齢は『発達は大事』よりも細かく1・2歳、3歳、4歳、5歳、6歳と大きく5つに分かれている。

アートやデザインによる表現の個所には、「幼児の活動」「保育者のサポート内容」「環境設定」が記載されている。さらに、第3章で述べた、ELG16「材料を使って創造すること」とELG17「想像力、表現力が豊かであること」に分けて記載されていることが特徴である。

『生まれてから5歳までは大事』に関しても、創造的音楽学習に関わる内容を取り出して記載する(日本語訳は中村)。

ELG 16: 材料を使って創造すること

1・2歳

- 空間、触感、音、リズム、身体の動き、素材、道具などを、全身を使って感じ、試す
- 保育者は、子どもが全身の感覚を使うことができるように、整然とした豊かな環境を作り、ねらいをもって素材を準備し与え、子どもたちが深くその活動に取り組める時間と空間を用意する

3歳

- 声を出したり歌ったりしながら、音や音楽を聴きながら、音が出るものや楽器で演奏しながら動く
- 手を叩く、腕を振るなど、見た動きを真似したり即興で動きを付けたりする
- 音楽を聴いたり、楽器・音のなるものを演奏したりしながら発声したり歌ったりする
- 様々な音、異なる文化の音楽を聴いて楽しむ
- 保育者は木、フライパン、ペットボトルなど、様々なものが入った様々な音を出す様々な物を準備する
- 保育者は音とリズムを説明する言語を子どもたちに紹介する(例: 大きい、柔らかい、速い、遅い)

4歳

- こすったり、振ったり、叩いたり、吹いたりして音を出す
- 楽器や楽器の音の響き方に興味を示し、楽器の演奏方法を試す(例: 大きい、静か、速い、遅い)
- 保育者は、子どもたちが音楽を聴いたりダンスを見たりする機会を設け、感情や発想から音や動きがどのように展開されているかに注意するよう促す

5歳

- 音や動きがどのように変化するか模索し、学ぶ
- シンプルな繰り返しリズムを叩く
- 意図的に音をつくったり使ったりする方法をより理解する
- 保育者は動きや音の変化に子どもたちを気付かせ、何

が起こっているのかについて話し、原因と結果について考える手助けをする（例：音がうるさくなる、静かになる、動きが大きくなる、小さくなるなど）

- 保育者は子どもたちが叩く、弾く、吹く、かき鳴らすなど、様々な方法で使用する様々な楽器を準備する

6歳

- 創造的に音と遊ぶ、歌っている曲や聴いている音楽のビートに合わせて演奏するなど、様々な方法で音楽を制作する
- 動き、音楽、ダンス、演劇、視覚芸術など様々な芸術を用いて、自分の考えや感情を表現し、人とコミュニケーションをとる
- 個別または小さなグループや大きなグループをつくり、子どもが取り掛かっている作業を説明するよう定期的に促す

ELG 17：想像力、表現力が豊かであること

1・2歳

- 自分を取り巻く世界（音、動き、人、物、感覚、感情など）に反応する
- 保育者は、子どもが全身の感覚を十分に使えるように、豊かな環境を整える

3歳

- 身体の動きと音で自分を表現する
- 例えば車の音や動物の音などの効果音とそれに合わせた動きを創造する
- 保育者は、雑誌、実際のキッチン用品、布地、フープ、スポンジ、ロープなど、さまざまな方法で利用できる身近なアイテムを準備する

4歳

- リズミカルな音と動きをつくる
- 音、動き、言葉、物を使ってごっこ遊びをしたり、怖い音楽など音や音楽の雰囲気や想像して言葉で表現したりする
- 保育者は、子どもたちが自分の作品（写真、音、動き、構造、物語、コラージュなど）を創作するための時間と空間を作る

5歳

- 動きや音を使って経験、知識、考え、感情を表現する
- 音楽、物語、考えなどから動きを試し、生み出す
- 歌をくちずさみ簡単な歌をつくる
- 物語に付随する音、動き、絵を創作する

- 子どもたちが物語に反応し、聞いたこと、想像したこと、楽しんだことを様々な表現方法や素材を使って表現できるような場を作る

6歳

- 自分のイメージを表現するために、楽器や音、色、素材などを選択する
- この音楽は恐竜のように聴こえるなど芸術作品から想像力を働かせる
- 保育者は、子どもたちの想像力を豊かにできるように、素材、物、自然物、画像、音楽、ダンスなどの経験をさせる

第3章で、ELG16の「材料を使って創造すること」について述べた際、文面的には製作活動に特化した内容になっているように感じたが、『生まれてから5歳までは大事』においては、素材を用いた音楽活動や、声や動きを用いた音楽活動が紹介されていた。一方、ELG17「想像力、表現力が豊かであること」の活動例として、ごっこ遊びに音楽を用いる活動や、物語やイメージしたものに音楽を付ける活動、音楽から想像する活動などが紹介されており、音楽だけの活動ではなく、様々な活動と融合した総合的な芸術が求められているようである。

4-4.『幼児期の音楽的発達は大変』における音楽表現活動について

『幼児期の音楽的発達は大変』（Music Development Matters in the Early Years（以下、MDM））は、音楽に特化した保育の実践ガイドである。年齢の区切りは、0-11ヵ月、8-20ヵ月、16-26ヵ月、22-36ヵ月、30-50ヵ月、40-60ヵ月以上と6つに細かく分かれている。内容は、「子どもの学び」「保育者のサポート内容」「環境」の3つに分けて記載されている。

MDMの解説には、「楽器」という言葉がMDM全体に使われているが、この言葉は音を出す可能性のあるすべての素材を指しており、例えばフライパンや木のスプーンも楽器とみなされると述べられ、MDMにおいても「素材」が大切にされていることがわかる。また、「子どもたちがタブレット端末や携帯型パソコンなどのモバイル機器を利用することは、今や当たり前の時代になっている。音楽制作をサポートし、可能にするために、デバイスを使用する方法は非常に多岐にわたる。機器の効果的な使用は、子どもたちの音楽制作や音楽的発達にプラスに働く。」⁴⁾という記述も見られ、ICT活用についても触れられている。

MDMには、「聞くと聴く（Hearing and Listening）」、「発声」と歌唱（Vocalising and Singing）」、「動き」と踊り

(Moving and Dancing)], 「探索と演奏 (Exploring and Playing)」の4つの分野に分けて活動例が示されている。特に、「探索と演奏」に創造的音楽学習に関わる内容が多く記載されていたため、ここを中心に取り上げることとする (日本語訳は水谷)。

0-11ヵ月

- 表面を軽く叩く、物を振る、太鼓を軽く叩くなど、音を探索することを通して周囲の環境を探る
- 保育者は子どもが周りの環境を探索するよう勧め、紙をひっかくなど物の表面や様々な素材を使って音を出して見せる

8-20ヵ月

- それぞれの手にマレットを持ち太鼓やチャイムなどを軽く叩く
- 短いマレットはコントロールしやすく凝った動きができる、長いマレットは大きく押し流すような動きができるといったように、マレットの長さは子どもがどれだけ遊べるかに影響するため、保育者はどの長さのマレットを渡すか考慮する

16-26ヵ月

- リズミカルに繰り返し楽器を演奏する
- 軽く叩く、こする、押し流す、マレットの端を使う、水平・垂直に楽器を打つなど様々な方法で楽器を使う

22-36ヵ月

- 音楽づくりで自分のパターンをつくる
- 例えば机の上、机の下、屋内、屋外など様々な場所で楽器を鳴らしたり、楽器を振ったり、軽く叩いたり、ひっかいたりといった様々な方法で音を探す
- 保育者は、子どもの音楽づくりを丁寧に聴き、これは音楽ではないと批判をせず、子どもの音のお絵描きとを考えて評価する
- 保育者は子どもの音楽パターンを真似することで、子どもの音楽づくりを聴き、評価していることを示すことができる
- 保育者は子どものつくった音楽のアイデアに、例えば大きな音で演奏していたら静かに反応するなど変化を加える
- 音楽は目に見えないものであり、その音楽が演奏された瞬間を捉えなければ消えてしまうものであるから、子どもの音楽づくりを録画する

30-50ヵ月

- 楽器で物語に伴奏となる効果音をつける
- 音楽づくりの際に指揮者になることで、他の子をリードしたり、またはされたりする
- ペアやグループの音楽づくりで他の子の音を聴いたりそれに反応したりする
- 保育者は子どもと演奏するとき、子どもの音のパターンを真似してから新しいアイデアを加えるなど子どもの音楽のアイデアを広げる方法を模索する

40-60ヵ月以上

- 例えば海辺、ジャングルなど、テーマに沿って音楽をつくる
- 録音機器を使って音を見つけ録音する
- 例えば、音楽の静かな部分で静かに演奏し、音楽が止まったら演奏を止めるというように、音楽の構造に合う楽器 (エアギターなどの想像上のものを含む) を演奏する
- 楽器を演奏するときに一定のビートを保ったり、自分のつくった音楽で自分の一定のビートを演奏したりする
- 名前や物、動物、歌詞の音節などの言葉に合わせてリズムを叩く
- 楽器やボディーパーカッションでリズムをつくる
- 歌っている歌や聴いている歌のビートに合わせて演奏する
- 1つ1つ楽器を演奏するよう勧め、他の子には注意深く聴くように言い、どんな音が説明させたり、聴きながら楽器ごとの音に合わせて動くように言ったりする
- 例えば、タンブリンは円、チャイムバーは長方形など、楽器を表す形を考え、子どもはその形の視覚的なパターンをつくり出し、自分や他の子どもたち、大人が演奏する
- 様々な楽器の音を絵で描き、保育者はその中から子どもの代表的なものを真似し、視覚的なパターンをつくり、それを子どもに演奏するよう促す
- 音楽は目に見えないものであるから、可能な場合は子どもの曲を録画し、それを再度演奏したり、保育者の音楽に子どもの音楽を入れてみる

MDM には、作曲活動や、図形楽譜作成とその演奏など、『発達は大事』や『生まれてから5歳までは大事』には見られなかった内容も記載されていた。また子どもの作品を、機器を使って録音や録画することが勧められている。さらに、MDM には、保育者が子どもの演奏を真似したり、新しいパターンで反応したりすることによって演奏の幅を

広げたり、長い演奏にしたりする指導法も具体的に紹介されている。2歳半ごろからは、音楽づくりの際に指揮者になって他の子どもをリードしたりされたりといった記述も見られ、子ども同士の関わりについても記載されていることも特徴の一つだと言える。

保育者にとっては参考にして活動に発展させやすい内容となっている。

5. まとめ

イングランドのEYFS指針と日本の幼稚園教育要領等の表現の領域において、様々な表現活動を通して、子どもたちの創造力、想像力、表現力を高めることを目指していることが共通していた。また、EYFS指針においても、幼稚園教育要領等においても、「素材」「道具」「用具」といった言葉が使用されており、少なくとも領域表現に関しては、イングランドと日本の目指している幼児の姿や保育活動の内容は類似していると言える。

このことから、イングランドの教育省などが公開している、保育者のためのガイドとなる「発達は大事」、「生まれてから5歳までは大事」、及び「幼児期の音楽的発達は大事」は日本の幼児音楽教育においても参考になるのではないだろうか。3つの資料で、今回特に注目した創造的音楽学習に関する実践例として示されていたのは次の様な内容であった。素材を用いた活動、物語に効果音や音楽を付ける活動、ダイナミクスや拍、強弱、テンポ、音の質といった音楽をつくる要素を学ぶための活動、作曲活動、リズム遊び、図形楽譜などである。これらは日本でも行われるべき内容であるし、様々な実践書では活動内容について紹介されている内容であるが、イングランドのように政府のホームページに公開されて共通して保育者全員が情報として得られるものではない。また、「生まれてから5歳までは大事」と「幼児期の音楽的発達は大事」には、環境設定についても詳しく記載されていた。日本の幼稚園教育要領等にも、随所に環境設定の大切さが述べられており、日本の保育実践においても必要な内容である。これら3つの資料は子どもの年齢別・月齢別の発達に応じた活動例を示しており、保育者にとって有用である。こういった、子どもの活動内容や、保育者のサポート内、及び環境設定について詳しく紹介されているものがあれば、もっと日本でも積極的に保育に創造的音楽学習を取り入れることができるのではないだろうか。今後はイングランドでこれらの保育実践の指針が幼児教育においてどのように活用されているのかについて調査したい。

また、イングランドでは、幼児の活動を評価して小学校入学前にEYFSプロファイルを作成する必要がある、その評価結果は保護者や小学校に報告される。イングランド

においてこの創造的音楽学習に関する活動がどのように評価されているのかについても今後調査し、それが幼小連携にどのような影響を及ぼしているのかについて研究したい。

引用文献

- 1) 高須一「英国国定音楽カリキュラムにおける創造的音楽学習に関する一考察—Keith Swanwickの批判を通して—」カリキュラム研究第5号, pp.99-110, 1996
- 2) Department for Education (2021), "Development Matters Non-statutory curriculum guidance for the early years foundation stage", https://assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/1007446/6.7534_DfE_Development_Matters_Report_and_illustrations_web__2_.pdf.
- 3) The Early Years Coalition (2021), 'Birth to 5 Matters', <https://birthto5matters.org.uk/wp-content/uploads/2021/04/Birthto5Matters-download.pdf>.
- 4) The British Association for Early Childhood Education (2018), 'Musical Development Matters in the Early Years', <https://early-education.org.uk/wp-content/uploads/2021/12/Musical-Development-Matters-ONLINE.pdf>.

参考文献

- 丹生裕一「イギリスの就学前教育の法定指針の特性 —日本の要領・指針との比較—」就実大学大学院教育学研究科紀要第7号, pp.75-91, 2022
- 鈴木敦子 (2018) "How Music Supports the Personal, Social and Emotional Development of Younger Children (3-5 years old) in England: The Educational Impacts of New Musical Development Matters", 教職研究2018, pp.13-28, 2019
- 中村勝美「イギリスにおける保育カリキュラムについて—乳幼児基礎段階(EYFS)を中心に—」広島女学院大学人間生活学部紀要第4号, pp.73-80, 2017
- 文部科学省「幼稚園教育要領」, 2017
- 藤掛絢子ほか「音楽領域における幼小接続カリキュラムの検討: イギリスとアメリカの比較を中心に」国際幼児教育研究第21巻, pp.17-25, 2014

参考 URL

- Cumbria County Council (2021), "Early Years Revised Framework Briefing Comparing Development Matters and Birth to 5 Matters", <https://www.cumbria.gov.uk/elibrary/Content/Internet/537/1459/7037/18082/18084/4433495740.pdf?timestamp=4433635947>
- Department for Education (2021), "Statutory framework for early years foundation stage", https://assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/974907/EYFS_framework_-_March_2021.pdf.
- Department for Education (2022), "Early years foundation stage: exemplification materials", <https://www.gov.uk/guidance/>

early-years-foundation-stage-exemplification-materials.

Department for Education (2022), "Early years foundation stage profile 2022 handbook", https://assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/1103221/WITHDRAWN_Early_years_foundation_stage_profile_handbook_2022.pdf.

Department for Education (2022), "Help for early years providers —Expressive arts and design—", <https://help-for-early-years-providers.education.gov.uk/expressive-arts-and-design>.

Early Education (2021), "Background Statement from the Early Years Coalition", <https://birthto5matters.org.uk/background/>.

Melhuish, E (2016) 'Longitudinal research and early years policy development in the UK', "International Journal of Child Care and Education Policy volume 10". <https://ijccep.springeropen.com/articles/10.1186/s40723-016-0019-1>.

Standards & Testing Agency (2014), "EYFS profile exemplification for the level of learning and development expected at the end of the EYFS Expressive arts and design ELG17- Being imaginative", https://www.towerhamlets.gov.uk/Documents/Children-and-families-services/Early_Years/Early_learning_goal_17_being_imaginative.pdf.

(2022年11月15日 受領／2022年12月8日 受理)